

# 地震・津波はいつ来るか分からない。町の備え、自分の備え

あの大地震から1年。目を覆うばかりの映像は、私たちに改めて津波の恐ろしさと、日頃からの備え、心構えが大事であるということをお伝えしました。

## 3・11に避難訓練を実施

町では、その教訓を生かすため、普段からの備えが大事だということから、東日本大震災発生の日である3月11日(日)に、小泊地域全域を対象とした大規模な避難訓練を実施しました。午前9時30分に地震が発生し



【避難する住民】

たとの想定で行われ、午前9時50分には防災無線で避難を促しました。放送後、開設された5か所の避難所には、おおよそ500人もの住民が駆けつけ、避難台帳への記入など、有事を想定した訓練が行われました。町の予想をはるかに上回る参加者数となり、住民の津波災害に対する関心、意識の高さが非常に感じられました。

このあと、非常食の試食や、自衛隊、警察からの講話も行われ、陸上自衛隊弘前駐屯地第39普通科連隊の渋谷浩治第2中隊長が、被災地での支援活動、五所川原警察署の東山良雄署長が、災害に対する備えの大切さについて話しました。

渋谷中隊長は、長期滞在を覚悟して被災地に向かったそうで行方不明者の捜索や被災者の生活援助、がれきの除去など、多くの活動を紹介します。有事には計画どおりいかないので、住民も最



【台帳へ情報を記入】

低限の備えが必要であることを力説していました。

参加した温泉町のある住民は「日本海中部地震では、家が壊されるなどの被害があった。今回の訓練を通して知識、経験を積み重ね、避難するときの助けになれば」と言い、また上町からの住民も「今回のような訓練は非常にいいこと。歩いてみて、体で覚えるのが大事」と、訓練の成果を強調していました。

## 小泊を襲った津波 広報が伝えた恐怖の記憶

記憶に新しいところで思い出されるのは、昭和58年5月26日に発生した「日本海中部地震」での津波。このときは死者5人、被災世帯数355世帯、家屋の損壊172戸、被害額約12億7千万円という惨事でした。(広報こどもり昭和58年6月号より)

当時の広報は「大きな悲しみと傷跡残す」と伝え、「いくら文明が進んでも、我々人間の力ではどうすることもできない化け物なのか」と、津波の恐ろしさを表現しています。

死者五人、住家、船舶など大被害  
総被害額は12億7千万円

項目	数
死者	5人
被災世帯	355世帯
家屋損壊	172戸
被害総額	約12億7千万円

# 津波避難の道しるべ

— 海拔表示を各地に設置 —

町では、自分がいる場所の海拔はどのくらいなのか、津波が発生した時どこに逃げればいいのかを、平日頃から意識してもらうため、小泊地域の49か所に海拔を表示しました（一部はこれから設置予定）。高いところから低いところまでさまざまな場所に設置しており、地震発生時の避難の目安となります。

津波が襲ってくるときは、何よりも先に高いところに逃げる。地震の教訓を生かすためにも、今回の海拔表示を活用してほしいと思います。

町ではこのほか、非常時の連絡体制の強化・整備や、非常食の備蓄など、災害に備える対策を今後も進めていきます。



【小泊地区設置場所】

このマークが目印 →

すぐ高台へ  
be careful. totsunamis.  
地震津波  
ここは  
海拔約 **6.5 m**  
中泊町 小泊地域



【下前地区設置場所】



【折戸地区設置場所】